安慧釈における『唯識三十頌』最後の五頌と五道の対応

孫　　儷　茗

Ⅰ　はじめに　世親『唯識三十頌』（以下『三十頌』）最後の五頌は修行の過程と果を示すものとされ，護法等造『成唯識論』は26～30頌を資糧位～究竟位に当て一頌一位説を取るが，梵本と蔵訳本に段階の表現はない．安慧『三十頌釈』においては29・30頌について「見道から果の成就に至る過程である」と述べるのみである．近代の研究では宇井伯寿氏[1]は安慧が段階説を取るか否かには言及せず，山口益氏等[2]は安慧釈が26・27頌を資糧道，28頌を加行道，29・30頌を後半三道（見道～究竟道）に当てたとする．そもそも『成唯識論』以前の修行段階説は五段階説（『阿毘達磨集論』），四段階説（『摂大乗論』）等多様であり，また長尾雅人氏[3]は「勝解行地」を加行道を同一とするが，本稿は資糧道も勝解行地に含まれると考える．本稿は『瑜伽師地論』から四・五段階説の成立を概観し，後に『三十頌』最後の五頌と修行段階との対応を検討する．

Ⅱ　『瑜伽師地論』の勝解行地と「五道説」の成立　『瑜伽師地論』の諸修行段階説中，道諦（資糧道・方便道・清浄道――見道・修道・究竟道――）[4]と地義（資糧地・加行地・見地・修地・究竟地）[5]は五段階である．特に道諦の第二段階「方便道」（道諦釈によれば煖・頂・忍・世第一法）[6]は『倶舎論』に「世第一法等の諸加行道」[7]とあるように「加行道」とも呼ばれた．これらが『阿毘達磨集論』等の五道説の原形であろう．一方，『摂大乗論』に代表される四段階説（勝解行地・見道・修道・究竟道）[8]に関しては，その第一段階「勝解行地」が『瑜伽師地論』の十三住[9]と七地[10]の系統に現われる．『瑜伽師地論』（「本地分・菩薩地」）はこれを「初発心より，未だ清浄増上意楽（adhyāśaya）を得ない［間の］全ての菩薩行」[11]と述べ，五道で言えば資糧道と加行道の二段階に相当する．四段階説は勝解行地（五段階説の前二段階）と後半三段階とによって構成されると言えよう．本稿は「五道」が最も一般的修行段階名称であったと考える．

Ⅲ　『三十頌釈』と「五道」との対応　本稿は安慧釈『三十頌』の各頌冒頭に置かれて彼の見解を反映する設問，これを手がかりにして安慧の段階説観をさぐり，

「五道」との対応を分析する．

【26 頌設問】もし，この一切［のもの］が表象のみであるとすれば，なぜ眼・耳・鼻・舌・身によって，色・声・香・味・触［等の外境］を認識するのか．[12]

【26 頌】識が表象のみであることの中に住しない限り，二取の随眠は止息しない．[13]

安慧は「眼などによって色等を認識すると，このように考える」[14] 唯識観の初心者の立場で設問する．この初心者の阿頼耶識中には二取の種子が植え付けられている．従ってこの段階はまだ順決択分に入らず，所取を断じない資糧道である．

【27 頌設問】［瑜伽行者が］外境を離れて心のみであると認識する（upalambha）ので，［心は］心の法性に住している［と言える］のか．[15]

【27 頌】この（一切のもの）は表象のみであるというが，認識があるから，何らかのものを現前に置くのであるから，［心は］それ（表象のみであること）のみに住しない．[16]

設問が暗示するように，安慧はこの段階をすでに所取を離れた段階，順決択分中の忍位と見なす．安慧の解説によれば，瑜伽行者は「外境は存在しないというように認識し」[17]「清浄な表象のみであることに住したと考える」[18] が，それは「高慢な人」の誤りであって，その瑜伽行者は認識し把握して現前に置くから，まだ認識することに対する執着を断じない．その「執着を除くために」頌は「まだ心の法性に住しない」と言うのである．安慧は本頌を能取の執着を断じない段階と解釈しており，これは即ち加行道である．

【28 頌設問】いつ識（能取）に対する執着を断じ，心の法性に住するのか．[19]

【28 頌】もし，識（能取）が認識対象を認識しない時，［心は］表象のみであることに住する．所取がない時，それ（所取）を認識するものもないからである．[20]

安慧設問は 28 頌を「能取の執着を断ずる」段階と見る．またこの段階で対象を如実に見るから能取に対する執着を断じ，自らの心の法性に住すると述べる．能取の無は見道に入ることであり，従って 28 頌は見道に当たる．

【29・30 頌設問】以上［28 頌で説明した］ように，心が表象のみであることに住するとき，［心は］どのように示されるのか．[21]

【29.30 頌】これ（心）は無心であり，無所得である．それ（心）はまた，出世間の智である．二種の麁重を断ずることによって所依の転換がある．(29)

これ（心）こそが無漏であり，界であり，不思議であり，善であり，恒常である．これ（心）は楽であり，解脱身であり，これ（心）は大牟尼の法と言われるものである．[22] (30)

設問に明らかなように，安慧は 28 頌の見道――初地入心の刹那に始まる「心」はどのようなものかと問い，29 頌前半「無心・無所得・出世間智」をその答えとして見道に当てた．調伏天の注釈もここを見道の分位とする．『成唯識論』はこの部分を修道位とするが，本稿は両者の相違を「初地入心・住心・出心」の角度から考えたい．『瑜伽師地論』に言う如く「見道は瞬間的に智が生ずる」[23] に対して

「修道は長時間持続する」[24]．また「無心・無所得・出世間智」は見道（初地入心）から修道（初地住心・出心～十地）果の成就（究竟道）に至るまで持続される．『成唯識論』の見解は住心・出心の観点とも言えるのである．

安慧は29頌後半と30頌を「上へ上へと進み，果の成就に至る過程」とする以外に段階を示さない．29頌の転依の部分は調伏天注釈がこれを修道とする．第30頌の「無漏・界・不思議・善・常」は常住相，不可思議相のような仏の法身の相である．安慧は彼の『荘厳経論』「教授教誡品」[25]注釈に『摂大乗論』を引用した際にも，第五不可思議相を用いて法身を表現しており，30頌を究竟道の心の状態と見ていたことは明らかである．

Ⅳ　結語　五道説は『瑜伽師地論』においてその原形が成立し，広く用いられた代表的修行段階説である．安慧も『三十頌釈』最後の五頌について，29頌前半以外は一頌を一道に対応させた．29頌前半に関する安慧と『成唯識論』の見解の相違は，安慧が「初地入心」の観点からこれを見道の分位としたことによるのである．

1）宇井伯寿『安慧護法唯識三十頌釈論』[1990] pp. 140-157，勝又俊教『仏教における心識説の研究』[1988] pp. 271-282，結城令聞『世親唯識の研究』上，[1986] pp. 333-336，荒牧典俊「唯識三十論」『大乗仏典15　世親論集』[1991] pp. 177-190.　2）山口　益・野沢静証『世親唯識の原典解明』[1965] pp. 386-399.　3）「加行道は本節では信解行地の名で呼ばれている」『摂大乗論和訳と注解』下 [1995] p. 14.　4）大正30,655c. 5）大正30,751a.　6）註記4に同じ.　7）大正29,121a.　8）デルケ版チベット大蔵経（以下Dと略す）D4048,23b3, 大正31,142b.　9）大正30,552c-553a.　10）大正30,565a.　11）Dutt, N. Bodhisattvabhūmiḥ, p. 218*l.* 18, 漢訳は「云何菩薩勝解行住．謂諸菩薩従初発心乃至未得意楽清浄所有一切諸菩薩行」（大正30,553b）.　12）Lévi, S., *Triṃśikāvijiñaptibhāsyaṃ*（以下Léviと略す），p. 42, *ll.* 9-11.　13）Lévi, p. 42*ll.* 12-13.　14）Lévi, p. 42*ll.* 22-23.　15）Lévi, p. 42*ll.* 23-24.　16）Lévi, p. 42*ll.* 25-26.　17）Lévi, p. 43*ll.* 1-4.　18）註記16に同じ.　19）Lévi, p. 43*ll.* 8-9.　20）Lévi, p. 43*ll.* 10-11.　21）Lévi, p. 43*ll.* 20-21.　22）Lévi, p. 43*ll.* 22-25.　23）「本地分・声聞地」大正30,445b.　24）註記23に同じ.　25）D4034,275a*ll.* 2-3.

〈キーワード〉『唯識三十頌』，安慧，五道

（龍谷大学大学院）